



TAKE OFF press

TAKEO Future Frontier

【校是】質実剛健 報恩感謝

佐賀県立武雄高等学校

校長通信 NO. 12 R6. 09. 15

文責 校長 下村 昌弘

E-Mail shimomura-masahiro@education.saga.jp



学校 HP

武陵祭終わる — “築こう我らの武雄^{ぶゆう}伝” で新たに築かれた武勇伝は何か —

いい武陵祭だった。

武雄市文化会館の改築で初めて使わせていただいたケーブルワン・スポーツパーク。ステージ設定にはそれなりの費用がかかったが舞台と観客が近くかえって一体感が高まった。

残暑厳しく日中は 37℃ に迫る体育祭。みんなへとへとになりながらも笑顔を絶やさなかった。生徒会、団長を中心としたサーバントリーダーシップが発揮された。

今はその余韻もつかの間、日々の日常が戻ってきた。その日常とは何か。

協働の喜びやうまくいかなかった後悔など、“祭り” という非日常で体験した興奮と感慨を伴って学んだ一粒の砂金が、日々の習慣の中に宿り、やがて人生の習慣となる。人の個性、学校の個性、文化の個性をゆっくりと確かなものにしていく習慣の力。日々を緩やかに支えるものとしての習慣の力にもっと自覚的であっていい。習慣は人を裏切らない。

武陵祭が佐賀県西部地区のシンクタンクの学校の最大のイベントとして、今後もっと地域に開かれていくことを切に願っている。



学部・学科をどう選ぶか — ありたい自分・自分のアイデンティティを自問する —

これまでの教師生活を振り返ると、基本的には「学部・学科さえ間違わなければさっさと大学に入ってその道の勉強をしたほうがいい」と思ってきた。

大学にこだわって何年も浪人するよりも、早く専門の道に入ったほうが結果として幸せな人生になると。しかし一方で特定の大学にこだわり続けることの妙味も確かにある。特に私学などは、学部をずらしてでもその大学に行きたいという受験生は一定数いる。(早稲田に行きたくて学部を問わずに受験するなど。)

かくいう私も若気の至りか、某私大英文科に進んだものの、違和感から国立大を再受験。今度は志望大学の文学部。しかし先輩の^{ひんしゅく}顰蹙を買いながら途中で教育学部へ転学部。今にして思うと無駄だったのではないかと思うこともある。ちなみに私の専門は国語。

医者や教師は大学で学んだことと仕事とが結びつきやすい。しかし、多くの大人たちは、



18 歳の頃、社会のことが分かっているようでいて、実は全く分かっていなかったのではないかと思う。何がやりたいのか、自分には何ができるのかわかって、実はほとんど分かってない。自分もそうだった。

大学入学前に人気だった職業は、卒業時には陰りを見せ、10 年もすれば社会は大きく変わってしまう。まして今や VUCA の時代。変化のサイクルも早い。

果たして 18 歳の自分が思い描いていたことは、今、どれくらい実現しているのか。あるいは実現する価値があったと言えるのだろうか、還暦を迎えた今、自問している。そこで



他の先生から不謹慎と言われるかもしれないが、老教師として思い切って君たちに言おう。

「やりたいこと」や「なりたい職業」をイメージして学部を選ぶのは進路選択の王道だ。それは正しいやり方だと思う。しかし、それは時代がゆるやかに流れていて変化が少ない時代には有効だ。将来から逆算して今何をすべきか、そのルートが見えやすいからだ。

ところが今の時代、いや実は昔から、果たしてどれくらいの人があるそのルートに乗り続けることができるのだろうか。現実にはこのルートやスケジュールから外れることもあり、いやむしろ外れてしまうことのほうが普通で、そのことでかえって必要以上に劣等感や自己嫌悪に苛まれることになってしまっているのではないかな。

将来の夢、これはこれで必要だ。しかし「やりたい」「なりたい」ではなく、「どうありたいのか」「どう考えるのか」、今を自分に問うことこそが大事なのだと思う。

人生は思いどおりにはいかない。しかしそれでも自分で自分の人生は引き受けなければならない。人生の岐路に立った時、「どうありたいのか」と自分に問いかけてみてほしい。

深く、そして早く！ ー共通テストにむけて何を鍛えればよいのか？ー

共通テストの出願が始まる。共通テストは考えさせる良問が多いが、逆に言うと対策が厄介だ。まず、国語に限らず理系教科も文字数がめちゃくちゃ多い。

日本人の平均読書速度は1分間に500～600字と言われている。音読ではその半分くらいの300字が聞き取りやすい。共通テストの国語の文字数は約25,000字なので、読むだけで約50分かかることになる。今年から1問増えるが時間は10分しか増えないからさらにスピードが要求される。

試験では通常読むスピードよりもうんと早い速度で読み進めなければならず、速読の練習を積み重ねる必要がある。これは年齢に従って向上する能力ではあるが限界があり、意図的に鍛えなければ試験には対応できない。

新聞のコラムは約600字くらいだから普通のスピードだと1分くらい。しかし試験を考えてその半分の30秒を目指して読む練習をしたい。はじめは大変かもしれないが、コラムの内容は評論と違って比較的分かりやすいから、毎日夕食後、ゲーム感覚でやってみたらどうだろう。“「習う」より「慣れよ」！”だ。たった1分程度の努力。

時間を決めてその中で読む、問題を解くという臨場感が緊張を生み、その緊張感が集中力を高める。ただし、時間ばかりを気にして表面を撫でるような浅い読みや勉強に終わっては意味がない。あくまで深くしっかりと、そしてスピードを目指す。

3年生にとってこれからは模擬試験ラッシュ。ますますトライ＆エラーの繰り返しだ。試験の連続で大変だろうが、その試験で何を試すのか、目的をもって取り組んでほしい。

1・2年生は「多読・多書（たくさん読んでたくさん書く）」の原則を大切にしながら“探究の型（深くじっくり）”をしっかりと鍛えてほしい。

【当面の主な予定（9月後半）】

- 17日（火）月曜セミナー（1・2年）
- 21日（土）土曜セミナー（全）
- 22日（日）秋分の日
- 23日（月）振替休日
- 24日（火）月曜セミナー（1・2年）
防犯・薬物乱用防止・交通安全講話

（閑人閑話）弔辞を読んだ。人生で2度目である。亡くなったのは大学の先輩であり、大学院で指導していただいた恩師。▼人前で話をする機会がたまたまある。長くなるのが難点。小松政市長や山口祥義知事みたいなノー原稿で人を引き付ける短い話がしたい。▼以前、小松市長に訊いたことがある。「話の内容はどうやって考えていますか？」市長曰く「人は見たいものしか見ない。聞きたいことしか聞かない。だから相手が何を聞きたがっているのか考える」と。▼弔辞は準備する時間が圧倒的に短い。1週間も2週間も待つてくれない。せいぜい1日か2日程度。とにかく恩師の顔を思い浮かべながら考えた。途中2度泣いた。▼タモリが赤塚不二夫に語った弔辞が話題になった。私もあなたの作品の一つです。心に残る言葉だ。▼言葉に相手への最大のリスペクトがあればきっと胸を打つものなのだろう。（昌）